70

『一原三岐』について

鶴田　泰平
日本鍼灸研究会

『一原三岐』（著者・成書年未詳）は，任脈，督脈，衝脈の三脈の終始とその作用などを論じた「一原三岐之弁」と任脈，督脈と正経十二経を合わせた十四経の経穴に関する解説部分からなる経脈経穴書で，享保20年［1735］に相澤篤敬なる人物により書写された写本（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵．請求記号9.22486.1．オリエント出版社・『臨床鍼灸古典全書』第27冊所収.）が残る．

本書の構成は，「一原三岐之弁」を巻頭に附し，その冒頭に，任脈，督脈，衝脈の三脈は奇経であり，その原を一（男性は精室，女性は子宮血海）として三脈に分岐していくことを述べ，続いて①『素問』骨空論の王冰注，『十四経発揮』により，人体の腹背の陰陽属性を，②『素問』金匱真言論，同骨空論の『類経』（張介賓）注により，経脈・絡脈としての三脈の陰陽属性を，③『素問』骨空論，『十四経発揮』により，三脈脈が会陰穴より出ることを，④『素問」上古天真論，同五音五味篇，『婦人良方』により，陰の脈としての任脈・衝脈への血の流入論に加え，それを作用機序とした男女の髭の有無と月経との関係を，⑤『素問』骨空論，『十四経発揮』の滑伯仁の説と馬玄臺注，張介賓の説，丁徳用の説により，会陰穴とは違う曲骨・気衝といった詳細な三脈の起始部（穴）を，⑥『素問』骨空論，『十四経発揮』，「大人形」「小人形」と称する資料の経絡流注により，詳細な三脈の連絡と終点部を論じている．また，十四経の経穴の解説部分は，任脈21穴，督脈25穴，手太陰肺経11穴，手陽明大腸経20穴，手陽明胃経45穴，足太陰脾経21穴，手少陰心経9穴，手太陽小腸経19穴，足太陽膀胱経63穴，足少陰腎経25穴，手厥陰心包経9穴，手少陽三焦経23穴，足少陽胆経43穴，足厥陰肝経14穴の計348の経穴について，『素問』『明堂灸経』『神応経』『甲乙経』『千金方』『類経』『類経図翼』『普済本事方』『医学入門』『鍼灸聚英』『鍼灸入門』『史記』他の，多数の医経・医方書・鍼灸書などを引用し，経穴の位置と別名，鍼法，灸法，禁忌などの情報を記述している．最後に，「享保二十乙卯．十月四日写為終云云．相澤菴竹軒篤敬.」と署名がある．なお，体裁については，漢文と平仮名片仮名混じりの読み下し文が混在し，経脈名や経穴名には右肩に鉤括弧が附され，書名や人名などの典拠には，文字の上に二重線が上書きされているが，これらは原書からのものか，書写以降のものかは未詳である．

本書の著者については未詳であるが，多くの典拠書物の引用や「大人形」「小人形」といった特殊な資料を入手閲覧できる立場にあった人物であることが推測できる．また，書写した相澤篤敬についても未詳であるが，経穴解説部分の任脈・会陰穴の箇所に，篤敬の書き込みによると思われる「惣じて穴を求むるに，尺寸を用いるは末の義なり．肉隙骨空を以って求むるを穴の本意とす．然れども寸を捨てるには非ず.」の注があり，経穴の取穴や治療に対する姿勢，医学文献に対する造詣の一端を窺うことができる．

今回は『一原三岐』で論じられている任脈・督脈・衝脈に関する「一原三岐論」と未詳である著者について考察することを目的に，引用される典拠書物と，引用該当部分の調査・比較検討を行った．